

子ども理解と学級・授業づくり

～困難な状況で、どう子どもたちと楽しいクラスをつくり出すか～

NPO 法人おおさか教育相談研究所 甲斐真知子

<自己紹介>

- ・現：NPO 法人おおさか教育相談研究所 副理事長 相談員（保護者や教職員の主に不登校・いじめの相談）
- ・元：小学校教員：37年間：担当学年＜412125634122565643支支634111学6学1565634コ＞ 支→支援学級 学→少人数（算数） コ→コーディネーター（発達障害・不登校支援）
退職後大学教員：6年間（人間発達学部・子ども発達学科で主に小学校教員養成の科目を担当）

1. 困難なことにぶつかった時、子どもたちの笑顔をどう守るか

(1) 2020年8月22・23日 教育相談おおさか「登校拒否・不登校電話無料相談」から見えた困難

- ① コロナ禍による長期休校・分散登校・部分登校は子どもたちに大きな影響を与えた。それは「生活リズムの乱れ」「集中力の低下」「心身の不調・不安」となって現れている。不登校無料電話相談での悩みから。
 - 1) 生活リズムが乱れ夜遅くまで起きている・起床できない・昼夜逆転・ゲーム漬けの生活となった。
 - 2) 友だちとの運動や遊びが減り、学習への集中力や、生活の意欲や覇気をなくしてしまった。
 - 3) 心身の不調・不安は、蕁麻疹・過呼吸・頭痛・腹痛・食が細くなる・個食（孤食）などに表れた
- ② コロナ禍のもと、子どもの成長に必要なものが改めてはっきりした。子どもたちに必要なものは「安定した生活リズム」「友だちとの遊び・学び・運動」「安心・安全な生活」

(2) 福島の「保育実践」に学ぶ（2020年8月保育合研で報告）。目に見えない放射線から子どもを守り育てる

- ① 学び続け、答えを自分たちで探した。散歩を続けるために道端のザリガニの放射線量まで測った。
- ② 不安や異論を率直に語り合い・互いに認め合い細かく対策をとって信頼を築いて行った。「譲れない保育内容は何か」の合意をめざした。保護者ともていねいな合意を重ねた。
- ③ 全国の仲間に発信し、共同を進めた。
100年後の未来も、子どもたちが自然の中で遊べる環境をあきらめないでつくっていくために。

(3) 困難にぶつかった時→守りに入らず、ポイントをしぼる。そして知恵をしぼる

- ① 反社会的な親の対応に、クラスも学年も学校も固まってしまうようなクラスの時（小学校2年生）
 - 1) 明るい話題をばらまく→緊張している保護者のために、楽しい学級通信をどんどん出す。
 - 2) 明るい実践を広げる→子どもたちのために「あのクラス楽しそう！」教室からはみ出る実践を。
 - 3) 反社会的攻撃から身を守るためには、管理職に盾になってもらう→本当に何度も助けてもらった。
- ② 「学級崩壊」したクラスで楽しく過ごすために 役に立った3つの柱（小学校6年生）
 - 1) 子どもの願いを聴く→子どもの成長の鍵は「願い」。彼らは「荒れ」ながら「何を願っているのか」。
 - 2) 100点をめざさない→卒業式の時、50点だったら「満点」というぐらいの気持ちで。
 - 3) 一人でがんばらない→同僚・管理職・保護者・祖父母・地域の力、なんでも借りて「大船」に乗って。
- ③ ADHDのB君に「おたのしみ会」を潰されてしまうクラス（小学校3・4年）
 - 1) 「おたのしみ会」をあきらめない。B君の大嫌いな「おたのしみ会」を工夫して続けていく。
 - 2) 「おたのしみ会」は準備も本番も時間をかけない。教育課程に位置付け隙間時間で豊かな中身に。
 - 3) 「おたのしみ会の歴史」を作り教室に展示していく。みんなで成長の確認をすることで力に。

(4) 「コロナ禍」という困難の中で、どう実践を切り開いていくか

- ① 「困難な状況にぶつかった時」の実践に共通していること
「子どもの願い」「教育課程づくり」「共同の力」困難であればあるほど教育の本来の形を大切に。
- ② 長期休校ですべての子どもが失った学校教育への信頼を、時間をかけて取り戻す。3年はかかる。
取り戻していく過程を、クラスの子どもたちはもちろん、校内・父母・地域に広く知らせる。そのことによって共同の力で子どもたちの安心・安全な居場所をつくっていく。
- ③ 今も続く「マスク生活」の中で「子どもの権利」を守り発展させるため、最大限の工夫をする。
「マスク」は先生の表情も見えないが、子どもの表情は先生に見えない。意識してコロナ禍の子ども理解を深め、子どもたちの願いに沿った「教育課程」をつくること。そして少人数学級の必要性など教育要求を出し続け、悪戦苦闘している全国の保育所・学童・放課後デイの実践に学ぶ。
- ④ 医療・介護のお仕事はコロナ禍の最前線で戦い。保育・教育現場の仕事は最後列で日本の未来を守る戦い。同僚同士、働く覇気を失わないようお互いに声かけあって楽しく知恵を巡らせて。
- ⑤ アフターコロナを狙う教育産業や教育行政の企を見抜く。デジタル教科書・オンライン授業タブレット授業の推進は、「マスクのままの閉じた授業」を正当化し続けることと表裏一体。

2. 子ども理解と学級・授業づくり（提案）

(1) 「学びの感動」のある授業づくり

- ① まずは「授業スタンダード」をやめる。
 - ・「めあて」で始まるワンパターン授業のつまらなさ。押し付け「授業スタンダード」をやめる。
 - ・「学びの感動」のある授業→子どもたちの思考は5000年の時空を超える。水のかさ。資料①
- ② わからない辛さを理解する。「ゆっくり教えて」「納得できないのだけど」と言えない、見えない。
 - ・ひらがな・漢字は1年かけて、手指の力をつけながら書き、言葉を集め、使って身につける。
 - ・算数のつまずきは、小学校1年生の繰り上がりと繰り下がり。勉強は次年度が勝負。ゆっくり。
- ③ コロナ禍に「学びの感動」のある授業をどうつくっていくか。
 - 1) 「マスク」の壁をどうとるか・・・先生の顔の半分が隠れている不安の中の授業。
 - ・全身を使つての表現力を磨く。先生の話し方で伝わりかたは全く変わる。話し方の力を磨く。
 - ・先生の動線・視線を広く大きく、子どもの声を聞きにそばに行き、クラスの子全体に伝える。
 - ・マスクに負けない「密接」なつながりを教育のベースに→作文・日記・学級通信・一枚文集。
 - 2) 「学びの感動」のある授業を
 - ・「教育課程づくり」に取り組む→各々の学校で事情が違うコロナ禍の今こそ教育課程づくりを。文科省も昨年から盛んに奨励している。1年分でなくても、ザクっとでもいい。まずつくる。
 - ・単元の時間配分を考える→この単元をどうワクワクとした力のつく授業にするか資料②
 - ・コロナ禍だからこそ1回1回の参観授業を大切に資料③。保護者の安心と共同へ。

(2) 子どもたちの「願い」をたいせつにした学級づくり

- ① まずは「学校スタンダード」「ゼロトレランス」をもとにした生活指導をやめる。
 - ・なぜ「鉛筆の本数」まで学校が決めているのか。「学校スタンダード」は子どもの主体性を奪う。
 - ・クラスのことを決める時は、先生も提案者の一人。子どもと一緒に話し合つて決め、進める。
- ② 「笑い合える楽しさ」を生む特活や文化活動・行事→それは生きていく力をつけるということ。
 - ・子どもたちで願いを出し合い、子どもたちで考えてとりくむ。自分の意見を言い、話し合つてとりくむ。違う意見の時は友だちと折り合いをつける。やってみて、うまくいかない経験や、

失敗をたくさん経験し、次の工夫につなげる。⇒次の願いを出し合う。

- ・こんな取り組みをしている時子どもは笑う。笑いの中で「小さなこと」を自画自賛しあったり、「小さな失敗」を笑い飛ばしあったりしたくましくなっていく。そして「小さな」自信を重ねる。

③ 文化活動や特活は生きていく力をつけるための「譲ることのできない教育活動」。

- ・「授業数確保」のためと、行事や文化・特活を削るということは子どもの生きる力を削ること。
- ・教科学習と行事・特活・文化活動を教育課程の中にしっかり位置付ける。そのことで時間が上手に使い、とりくみも生き生きと充実する。同僚や父母の理解や合意を得るためにも必要。

④ コロナ禍に子どもたちの「願い」をたいせつにした学級づくりをどう進めるか

1) コロナ禍の子どもたちの思いを理解する・・・「マスク」の中の願いを読み取る

・「手のかからない子どもたち」にていねいに手を掛ける

いわゆる「手のかからない子どもたち」は“マスクをかけ・手指を消毒し・3密話避け”で迷惑をかけずにもう1年近く過ごしている。緊張の連続である。たくさん話しかけてほしい。日記や作文の返事に気を配り、その子だけへの気持ちが和む楽しい内容の返事を書いてほしい。

・発達に課題がある子どもたち

周りの変化に気持ちがついていっていないことが考えられる。変化に対応しにくい子ども・敏感な子ども・コミュニケーションが苦手な子ども、その子の反応を見ていねいな説明を。

・学校に来にくくなっている子どもたち

おうちの方は勉強が遅れること、ゲームばかりしていることを気にされることが多い。「どうして学校に来ないのか」聞かず・生活リズムやゲームのことを指摘せず・「心配しなくていい今はゆっくり休むことが大切」と伝え、定期的な家庭訪問（雑談）で信頼関係をつくることから。

・いじめへの対応・・・「マスク」でいじめも見えない。「指先いじめ」はもっと見えない。

ネットの中の子どもたちのつぶやきは、ほとんど学校では把握できていない。架空のゲームの世界と現実の世界が入り混じった中で、いじめが広がっているのではないか。この間、子どもたちが一番失った「遊びの時間」「特活・行事・文化活動」をたいせつにしていくことから。

2) 子どもたちの不安や緊張感を取るために

- ・居心地の良いクラス環境づくり→消毒で大変だけど、掃除してまず子どもたちの作品をカッコよく展示する。子どもたちと、花・生き物・詩・歌・絵本・地図・楽しいコーナーを作る。
- ・先生の人柄をもっとオープンに→雑談・小話・先生の小さいころ・今朝見た良い話など。
- ・暇そうにする→鼻歌を歌っていると子どもたちは話しかけてくる。掃除の時、休み時間。
- ・「赤い糸」をつくる→先生と個人を結ぶ35~40本の赤い糸。作文・日記・家庭学習帳など。

3) 楽しい特活・行事・文化活動を工夫して

- ・きまりは一緒につくる。子どもたちは「自分たちで決める力」も「落とし所」知っている。
- ・子どもの力をみつける。大人より寛容性があり、忖度せず、フォローする力もすごい。資料④
- ・行事を簡単に諦めない。中止になったものは何か代替えのものを工夫する。←きっと楽しい。
- ・参観授業や教科学習と結びつけた行事や文化活動。まずは節々の「お楽しみ会」が一番。
- ・何に取り組んでも、反省はまず「良かったことは何でしょう」から。

4) 子どもたちは未来→コロナ禍からS D Gs 誰一人取り残さない持続可能な世界をつくる力を。

3. 「子どもの貧困」は見えにくい 親の貧困=子どもの貧困。経済的に苦しく展望を持ちにくい親は確実に増えている。「自助・共助・公助」では子どもが犠牲に。学校では楽しく美味しい給食の保証。

4. 学校で働くみんなが、まず笑顔で元気に 同僚が元気で働き続けられるよう、マスクからあふれる笑顔で声かけを。何か取り組んだら、くす玉や一本締めでもお互いに「ごくろうさま！」と。